

2026/3/29「死線を越えて」ヨハネ19：25－30

さ405 信仰告白・生活綱領 せ396 (396)

京都復興教会で最後の礼拝を迎えました。先週には、心のこもった感謝のつどいに、150名の方々が集まってくださり、連日たくさんの方々がお電話やお手紙や訪問を頂きました。「お葬式みたいやな」とふと思う瞬間があるほどでしたが、もちろん私たちは、死ぬわけではありません。迫害されたのでもありません。また再会の機会もきっとあるでしょう。それを思うと、イエス様の十字架の犠牲は、なんとという大きな大きな出来事であったことかと、今更ながらに思われます。その贖いの尊さゆえに、その救いの確かさを感謝します。

唯一無二の、身代わり

わたしたちは、一番大切なもののほど、当たり前前に思ってしまうどうしようもない部分を持っています。イエス様の十字架は、クリスチャンにとって「はじめの一步」ですから、知らないはずはありません。けれども、信仰告白も主の祈りも、信仰生活が長ければ長いほど、むしろ「わかっていること」になってしまいます。川柳の「いつまでもあると思うな親と金」ではありませんが、本当の価値にふさわしい応答をすることが、難しくなります。

イエス様の十字架は、そこに、こどもの死、王の死、罪なき者の死、そして何より神の子の死が、成し遂げられています。その尊さを深く心に留め、果てしなく大きな愛に、感謝を捧げましょう。この偉大さを味わう、きっと一番良い方法は、自らがそのイエス様のように生きようとすることです。応答して、はじめて自分の小ささがわかります。その謙遜さを、主は喜び、いよいよ救いの恵みに満たされた存在として、魂を引き上げてくださいます。

死線を越えて

イエス様の他にも、同じように人類の残酷な歴史の中で、十字架刑の犠牲になった人々は数多くいました。リンチ刑やギロチンなど、恐怖と戦慄に陥らせる方法には、目を覆うばかりです。しかし、自ら進んで身代わりとなり、しかも理不尽で事実が歪められた身代わりでありながらそれをうけられた人は、イエス様以外におられないでしょう。さらには、母親の目の前で、「ユダヤの王」と言われながら、無罪でありながら妬みの犠牲となりはて、「神よ！私をお見捨てになるのですか！」と絶望に突き落とされた人は唯一無二の存在です。

しかしながら、唯一無二の身代わりの完成には、なお一筋の終わりの向こうにつながりがあることを、語らなければなりません。ヨハネは19章で終わらず、死線を越えた先の、あたたかな20～21章があるからです。この復活の証しをもって、唯一無二の身代わりは完成するのです。なぜなら、人類の中で、自分自身を含めて、復活することのできるひとは、誰一人存在しないからです。

結核患者の救済に生涯を捧げた、賀川豊彦のベストセラー、自伝のタイトルが『死線を越えて』です。何回も自身が血を吐き、死にそうになりながらも、病を克服して復活し、福音を証しして、その生涯を全うしました。彼が、死の恐怖に打ち勝つことができたのは、イエス様が唯一無二の身代わりとなってくださったことを信じていたからでした。その復活があるから、私たちのいのちが死で終わらないことを、信じることができたのです。

私たちの人生の中には、ときに「手遅れだった」「もう何もかもおしまいだ」と思えることがあります。しかしどんなに後悔しても、残念ながら時間を遡ることはできません。ただ変えることができるのは、未来です。十字架を取り消すことはできません。しかし、復活の朝から、世界は、新しい時代が始まっています。イエス様が息を引き取る直前に「成し遂げられた」と言われたのは、終わりのため息ではなく、準備完了！の宣言だったのです。